

第 6 号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

編集人 宮崎 榮

# 小松同窓会 会 報

不来方のお城の草に  
寝ころびて  
空に吸はれし  
十五の心

石川 啄木

## 天主台の追憶

校長 清水 郁夫

四月、校長として着任して間もないある日、大阪に住む小松中学校卒業の方から電話があり、この秋に天主台に同窓生が集い、旧交を暖める計画だという。

天主台は本校に学んだ者にとって、懐かしい青春の思い出を鮮やかに蘇らせる、まさに青春のシンボルそのものとして、深く心に刻まれていることを改めて知らされた。

小松中学校第十五回卒業の北村喜八氏の歌集『こころの歌』の中に、「愛しき追憶」と題する歌が収められている。

天主閣の上に寝そべり  
青空に眼をあそばせり  
中学の日は

怒る時不平ある時遁れきて  
城跡にいねて  
空をみいれり

本校は明治三十二年、石川県第四中学校として、古城の跡地に開設されて以来、今も同じ地に脈々とその歴史を刻む。学校をとりまく社会環境も生徒の気質も変わり、木造校舎は鉄筋校舎となり、校庭周辺のかつての稲田、蓮田も住宅地に変貌して、時代の変動を痛感するが、西端の天主台は昔と何も

変わっていない。

天主台の石組みは、三百五十余年の風雪に堪え、今なお築城当時のまゝ、いささかの揺ぎもなく堅固さを保ち、どっしりとした風格に加えて蒼枯の趣きを深めて聳えている。

私も高校時代、昼休みや放課後しばしば足を運んだものでした。天主台からの眺望は素晴らしく、四季折り折りの白山、とりわけ雪をいただいた白峰の雄姿は佳景である。

藁の生い茂る石段をのぼり、台上に寝そべっているうちに寝むりこみ、授業に遅刻するはめになったり、時には石垣に住む蛇をつかまえ、教卓にバケツを伏せてのせたりもしたものです。

部活動のしごきをうけたり、鉄拳を交える経験をした生徒も少なくない。ある時には同盟休校の企てが練られたとも聞く。青春の忘れがたい思い出に違いない。

天主台は詩情をそそる。また校歌や応援歌を高唱し、青春の血をたぎらす恰好な場所でもあった。そよ風に吹かれながら、思索にふけり、時を忘れて友と社会政治や人生を論じ、将来の夢を語り、悩みをいやして数々の友情が育まれた。

天主台下に繰り広げられた様々な青春のドラマは、その後の人生にはかり知れない心の糧となつて、数多くの逸材を世に送り出した。天主台の土壌に培われた闊達な伝統は、今も連綿と受け継がれている。

## 卒業記念に

### 勝木博士顕彰碑

平成五年三月卒業生四百五十四名が、卒業記念として、母校の先輩である勝木保次博士の碑を寄贈した。前庭中央に、卒業記念樹のシイノキと並んで建てられた碑は、小松城の樋であつたと推定される戸室石を利用したもので、青い陶板に、「誠は天道也」と刻まれている。

碑の裏の経歴板には博士の略歴が次のように刻まれている。

医学博士、小松市名誉市民、石川県名誉県民。明治三八年小松市龍助町生まれ。東大医学部卒業。欧米に留学、感覺生理学を研究、東京医科歯科大学学長となる。後、国立総合研究機構長に就任。聴覚生理学の分野では世界的権威者として知られ、朝日文化賞、日本学士院賞を受賞。日本学士院会員に推され、勲一等瑞宝章、文化勲章、北極星勲章(スウェーデン国王より)を受章、文化功労者となる。また郷土の科学教育振興のために、「勝木賞」を創設した。



夏の高校野球のシーズンになると「今年は史上最多の〇〇校が参加した」といった新聞記事、テレビ放送をよく目や耳にする。まるで野球に対する理解が広まっているように思えるが、実は高校の数がふえているだけのことだ。考えてみれば、ぼくが小松高校へ通っていたころは、能美・小松に高校は二つしかなかった。小松高校と小松実高である。それがどうだ、現在では七つもあるではないか。

高校進学率が一〇〇パーセント近い日本のことだから無理もないというべきだろう。しかし、とcaえりみて考えると、日本でオギャアと生まれた子のほとんどが高校へ進学するという現状に、高校全入運動があったり、大学院大学が作られたり、生涯学習が叫ばれたりしているが、果して日本人はそれだけ利口になっているであらうか。

PKOということで自衛隊をカンボジアへ送ったことを考えても、国際貢献、国際貢献とやたら叫ばれたが、ぼくはあれはどうも日本のためだけを考えて行われたことのように思えてならない。高校進

学率、大学進学率が高くなり、高校や大学の数が増えるのに反比例して、日本人の視野はどんどん狭くなっているのではなからうか。

企業の海外進出や外国旅行者が多くなること、人間の視野を広げることにはつながっていないのである。学校と進学率の増加は、いたずらに知識だけを身につけ、その知識を上手にばらまくことのためみな人間ばかりが多くなって

## ぼくたちは

## 利口になったか

佐々木 守

来たのではないだろうか。

などと考えていた矢先、驚くような事実を知った。現在の芦城校、稚松校の原点ともいべき「集義堂」という教育施設が、今から二〇〇年も以前に小松に、しかも当時の町家を中心とした力によって開学していたという事実である。今年「集義堂二〇〇年祭」が行われるというのでそれをテレビドキュメンタリーとして制作する仕事がぼくに

まわって来た。

二〇〇年も前に、町衆の力で作られた学校「集義堂」！それはふるさとにおける歴史的快挙として誇るに足るものではないか。調べてみると、江戸時代には武士の子弟教育のための藩校や郷校は全国各地にあり、また町人の子どものための寺小屋の数も少なくなかった。だが町人教育のための寺小屋はまったく任意の個人によるものであつて組織

だった教育施設ではない。わずかに小松の「集義堂」と同じものは、大阪の「含翠堂」

あるのみである。ただし大阪平野郷の「含翠堂」は、小松の「集義堂」の七十七年前に開校している。あるいは「集義堂」はこの「含翠堂」を手本にして作られたのではないかとも思える。が、しかし、がっかりすることはない。大阪「含翠堂」は明治五年の学制発布で閉鎖

されてしまつて、現在は石碑を残すのみである。小松「集義堂」は、その学制施行と共に芦城小学校となり、のち稚松小学校と分かれて、現在まで連綿と続いているのである。

二〇〇年もの歴史を数える小学校は全国でも稀なのではなからうか(テレビ番組制作の過程でより詳しく調べてみたいと思つている)。そのテレビドキュメンタリーであるが、古代から現代にいたる日



本の「教育」の歴史をひもと

き、長い歲月の中で日本人がイメージして来た「教育」とはいったい何だったのか。その重層的な教育の歴史の中に「集義堂」の持つ意味はどこにあるのか。そしてこれからの「教育はどうあるべきか」を、ぼくなりに考えてみたいと思つている。

番組をみてもらうとして、この輝かしい「学校」の歴史を持つ小松の地に学んだぼくたちは、果して本当に利口になつたであらうか。それはもちろん先生方の責任ではなく、ぼくたち自身の生き方の問題である。

思えば昭和三十年三月に小松高校を卒業したぼくは、いわゆる「六〇年安保」を体験しつつ、その後の高度成長経済と「経済大国・日本」の繁栄の中で酔い痴れていたのではなかつたか。

もう一度問いたい。日本人は本当に利口になったか。利口の意味は人それぞれであるが、経済や科学文明の知識以外で、人間的に少しでも利口になっていなければ、「集義堂」を作った先祖たちに恥かしいのではないだろうか。(高校7回)

(シナリオライター。ラジオ・TV・映画のシナリオ、劇画の原作を執筆。代表作には、「ウルトラマン」、「七人の刑事」、「お荷物小荷物」、「アルプスの少女ハイジ」、「赤い絆」、「コメットさん」、「柔道一直線」などがある。)

独活の話

田中三無亭(悦吉)

「独活」とは中学三年生の国語の試験問題の一つである。習った覚えはなく口の中で「どくかつく」と呟いて見た

たが分からぬじまいで、空白の答案を出して控室に戻ると、何人もが集り、「独活」についてガヤガヤ騒いでいた。そこへ級長の村田君がやって来て、こともなげにあれば喰べる「うど」と読むのだと言った。悪童達は一杯喰わされた

と悲鳴をあげたものであった。その後「独活」について、試しに聞いて見たが、誰一人読める人はいませんでした。その時の国語の先生は永井先生といった。先生はいつも天井を向いて講義されるのを、不思議に思

って悪童の一人が問ねると、先生は「私は小松中学校に来る前は女学校に奉職していたので、授業中に一点を見凝めていると、物議をか

もすので、天井を向いていれば無難と思つて講義していたのが習性になった」と苦笑されていた。

私が中学へ入学した頃は一クラス50人で三クラス、一五

〇人の定員でしたが、二年に進級する時に24人が落第し、それから毎年何人が落第して、卒業したのは84人と約半数で蕭条とした気持ちでした。私は実社会に出てからも淋しくさえないものでした。だから三人の子供に、若し能力さえあれば、とことん仕込んでやろうと心に誓つたものでしたが、三人の子供は夫々私の期待に

応えてくれました。家内は三人の子供とその孫達の事故のない間に死にたいと口癖のように申して居りましたが、皆を良く育ててくれたと感謝しています。

ところで「三無亭」というのが、私の号ですが、別に幕末の先覚者林子平の「六無齋」にあやかつたものでもなく、私の人生行路の中から、ごく自然に生れたもので、その意味は「徳なし、能なし、金もなし」です。因みに林子平の六無齋とは「親なし、妻なし、子なし、版木なし、金もなければ死にたくもなし」の号です。

私はローソクの灯のように、誰にも迷惑をかけないで、独り静かに人生を終えたいと願っているもの。こればかりは天命に委ねるほかはなく、私の生涯は所詮「三無亭」の一語につきると考えて居るところである。(中学24回)

思い出

通場 清朔

私が中学一年生だったのは、大正十二年でした。二期期の始業式が終つて帰宅し、村の公民館で、新聞を読んで居た九月一日の正午頃突然、地震

があり、驚いて外に飛び出しました。これが関東大地震の余波だった。当時は、まだラジオは普及しておらず、関東地方を中心とした交通機関は途絶し、通信機関も不通となり、色々なデマが飛んで、日本中

が不安な空気に包まれた。数日後、漸く汽車が動き出し、多くの被災者は、荷物のように積み込まれて、親戚、縁者を頼つて、地方に分散した。当時は上野駅から北陸線の小松駅までは十六時間かかった。放課後、小松駅に寄つた。駅前にはテントが張られ、町の奥さん方が、白簪姿で、着のみ着のまま降りて来る被災者

に、お握りや、お茶の接待に忙しく働いておられた情景は今でも忘れられない。当時の校長は島田先生だった。先生は、いつも黒い詰襟の洋服姿で、温厚で立派な人格者であつた印象が残っている。大高先生は、漢文の先生で温顔ながら、威厳があり、学識の深さが窺えられ、私共は先生の授業は、特に傾聴した。当時は学業は厳しくて、私共が二年生に進級する時は、百五十人中、三十五人が留年となり、以後、卒業するまで、毎年十人前後が留年させられた。今日母校が、県下の名門校として、評価されていることに、私は誇りを感じ一層の発展を祈念しています。(中学25回)

「ぱい」のミルクセーキ

任田 秀雄

テレビ、読書、散歩、ビール……と、まあまああの調子です。ここ一、二年、ごく親しいすじへの近況報告は、この二十二文字でごかんべん願っております。

わたしもよわいすでに傘寿を超え、まさに往時茫茫、すべてにアバウトながら、このごろしきりに少年の日のことが思い出されてなつかしい。わたしの郷里は手取川の右

岸の農村で、四月から半年間、秋の取り入れの終るころまでは小松まで自転車かよひ、十月のなかばころから知り合いの家に下宿しました。小松での生活は、農村ポット出のわたしには、いま流にいえば強烈なカルチャー・ショックの連続でした。そのころの思い出のひとつ。

中学三年の冬の暖かい晩に山根先生のお宅に遊びに行き、いろいろなお話をしていろいろに、気がついたら、先生から英語の関係代名詞の格、つまり主格、目的格、所有格の用法と見分け方をおそわっているのでした。まことにわかり易く教えていただきました。いまにして思えば、あの時、先生に英語の語法の精妙さに眼を開いていただいたのでした。いつとき過ぎて、頃合いに、美しい上品な奥さまが長めのグラスに乳白色の飲みものを置いて、しずかに去っていかれました。

「牛乳ですか」  
「牛乳のようなものだよ。ミルクセーキだ。ミルクに卵と調味料を入れてシェークしたものらしいよ。シェークの意味は自分で確かめなさい。」

あの時の先生のご説明と、  
一ぱいのミルクケーキの味は、  
いまでも忘れません。

(中学26回)

### 七福神

小村 三郎

子どもの頃、版画が好きで  
よくいも彫ったり、下駄屋  
へいって、朴や桂の木を買っ  
て彫ったものです。

最近、下手ながら年賀状  
は版画にきめ、相手の人によ  
り絵を選び、年賀葉書が発売  
されるとすぐ買って、印刷し  
ています。

たまく 去る年、ツアーで  
淡路島の七福神のお寺を参詣  
した折、寄付金のお礼として  
七福神の掛軸をもらい、これ  
を版画にできないものかと、  
まことに「盲蛇におじず」で  
とりかかった次第です。以後  
この道の先輩にも何かと指  
導をうけ、ベニヤ、和紙等、  
市内は勿論金沢まで足を伸ば  
し、失敗に失敗を重ねて、約  
半年がかりでようやく仕上げ、  
すり上げた時は、さすがにう  
れしかったものです。あとで  
右手の掌が痛みだし病院へ一  
ヶ月余り通院したが県、市の  
老人会の余技展に、すすめら

れて出品し、金賞、技能賞を  
うけ、恐縮しています。版画  
については、何の知識、技能  
もないものがよくこれだけやっ  
たものと、自分ながらあきれ  
ています。ただひまがあつた  
のと、自分の性分にあつてい  
たのと、七福神の宝生寺でも  
らった「ぼけない為の五ヶ条」  
の中の「趣味の楽しみを持ち  
云々」が頭からはなれなかつ  
たのかも知れません。

今はただ、居間にさげてあ  
る手製の七福神を、毎日見る  
のが楽しみ。今日この頃です。  
(中学33回)



(大島先生記念碑)

### 幸運

春木 きみ

四月二十九日いよいよ連休  
の始まり。東北は晴との気象  
情報を信じて雨の東京を出発。  
「長者原」という幸先の良い  
名のサービスエリアで最初の  
ガソリン満タン、税金を加え

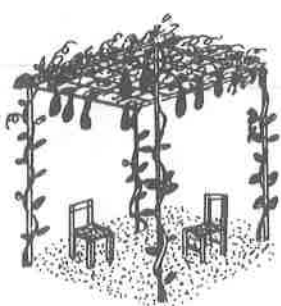
て丁度「七千円」という不思  
議さ。何か良いことが起りそ  
うで娘と二人ソワソワした気  
分になる。既に雨も上り山桜  
も桃も満開。新緑或いは冬木  
立とバラエティーに富んだ風  
景の中を秋田県田沢湖畔へむ  
かい、秋田駒を眺めつつ泊る。

三十日曇り。一昨年一足遅  
れで見損なつた枝垂桜に再挑  
戦のため角館へ。大切に保存  
された侍屋敷の戸毎に枝垂桜  
の大樹が、今日のために精一  
杯咲き誇っているように地に  
届く程垂れ下がり、街中が桜  
の波に溢れ想像以上の美しさ  
である。この花の下には舞妓  
より眉目秀でた若侍を立たせ  
たいものとふと思う。午後よ  
り雨、やがて霰に、目的地の  
十和田湖へ向かう峠の辺りよ  
り雪となる。まるでクリスマ  
スカードにしたい程美しい。

感激のあまりシャッターをし  
きりに切る。十和田湖畔の夜  
は小雪模様の内に更ける。対  
岸の灯も見えない。  
一日、思いもかけぬ晴天。  
湖岸を散歩しつゝ巨大な落の  
とうを摘み、左右の風景を賞  
でながら走り吾妻磐梯スカイ  
ラインを越えることにする。  
登る程に昨日の新雪で吾妻小

富士等の山々は銀の鱗のよう  
に輝き、此の世のものとは思  
えぬ美しさだ。中腹の道をぐ  
るりと廻ると行く手が妖しい  
霧田気だ。近ずけば視界が急  
に開け、見渡す限りの見事な  
樹水林である。針葉樹も落葉  
樹もすべて氷に被われ無数の  
氷柱が下がり、折からの太陽  
に繊細な銀線細工か硝子細工  
かと造化の妙に息を呑む。か  
すかな風にカラカラと音を立  
て夢の世界に遊ぶ心地である。  
今回の旅の幸運はこれに尽き  
ると俄か運命論者となりすべ  
てのものに感謝している。小  
松へ向かつて旅はまだまだ続  
く。

(県女19回)



ある日に

高塚 裕紀  
にほんの ひのまる  
なだて あかい  
かえらぬ むすこの

ちであかい

おだやかな午後、私は古い  
ノートのなかに、作者不詳の  
この詩を見付けたのだった。  
雪の少ない冬が続き、昔の  
藁靴や竹そり等が、民芸館に  
並んでいるのを、テレビは映  
し出している。

その時、電話のベル。いつ  
ものあわたましい友の声がい  
きなり、「読むわよ」と飛び  
こんでくる。

乳癌のために除去した  
乳房に カップをあてて  
靖国にゆく

今朝の新聞に載っていたの、  
じゃあね、ばあい。電話は切  
れてしまう。

「せっかち」と言いながら、  
私は切れた電話に向って、う  
ちの紫木蓮とてもきれいだっ  
たの、と言う。

かつて、靖国神社や護国神  
社に、夫が祀られることを拒  
んだ妻たちもいた。

友の夫も還つては来なかつ  
たのだ。  
(県女20回)

詩

幻影

中村 克己

ここは 山に挟まれた  
四十二軒の  
ひっそりした半農の部落

横を流れる川に  
上流から鉱毒が流れこんで  
いたとは  
誰も知らなかった  
知らされもしなかった

どれだけの隠された人生が  
伏せられたまま  
鉱山に  
部落に  
細い風のように泣きながら  
渡っていったことだろうか

珪肺 ストライキ  
不況 廃鉱  
坑夫たちが鉱山を下り  
太古のきれいな水に帰った  
というのに  
人人の心は 小さな胸に凍り  
とけようとしなかった

風物詩のように  
ゆったりと山の田園を走って

いた汽車も 幻影に過ぎなかつたのであろうか

十キロ離れた町へ

出勤する若ものたちは  
音を立てて流れる川に  
ただ ながし目をするだけで  
反逆するようにアクセルを  
ふんだ

カレンダーはめくられ  
やっと一つの汚染にくぎりか  
ついたらというのに  
突然 風景の前に現われた低  
い数棟のかたまりは何だろ  
うか

老人たちは顔をくもらせ  
何一つ語ろうとしない  
若ものたちも沈黙したままだ  
けさ  
土手では ひよわな土筆さへ  
天に向って 土を割ったとい  
うのに――

山の田園に  
ねむっているような  
起きていようような  
孤独な静止  
部落よ

(中学47回)

同窓会報によせて

塩元ウメ子

平成元年十月十五日創立九十周年記念全国大会が、小松高校で盛大に行われました。これを記念に、会報が発行されることになり、早や六号になりました。白楊会の、私のクラスのW様は同窓会の役員を二十年余され、会合には必ず出席されて、大学ノートに会合の内容、会計報告を詳細に明記し、年一回のクラス会には皆様方に大学ノートを回覧されます。その熱心、几帳面さに感心して、私も至りませんが少々お手伝いをして居ります。会報を毎回二十部位戴きますが、昭和十三年に、九十七名が卒業して以来、五十余年の間に、死亡消息不明の方三十余名、現在員は六十余名になりました。皆様方に平等に会報を送付するように心掛けています。第二号の一面に、加賀市出身の雪博士、中谷宇吉郎先生の記事が記載されていきました。早速、動橋のクラスの方に、会報を送りました所、近所に中谷先生の妹さんが住んで居られ、今は入院生活なので、御見舞がて

ら、病院へお見せに行つた所、大変喜ばれました。折返し御礼の電話があり、私も送ってあげてよかったです。心から嬉しくなりました。遠方の方には一筆添えて、万遍に行き渡りますように、名簿をたよりにチェックして、W様とお届けしたいと思えます。駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人、草鞋役になって、これからの余生、惚け防止にもと、微力ですがお役に立てばと思つて居ります。

ふる里の風のたよりや  
春名残る  
(県女26回)

ととも  
学友を尋ねて

安田 千種

拜啓

去る十二月二日は何とうれしい日だったでしょう。皆様御揃いで辺鄙な当病院へわざわざお出で下さいまして……。四十七年振りの再会を得ましたことの有難さ。二・三日余情のさめやらぬ心地でいました。お会いした瞬間、四十余年の空白はふつとび、あの頃の面影の懐かしく胸あつく……何をお喋りしたやら……。本当に有難うございました。うれしい日をありがとう。

面影のよみがえりきて懐かしく学友らに見舞に涙こぼるる四十余年の空白埋めて友だちと語らう病舎に冬の陽の照る皆様のお多幸を祈っています。簡単ですが右御礼迄。

よし糸

筋ジスで金沢の医王病院に入っておられる崎田さんをお尋ねした時、不自由な手でどうしてこのような立派なお返事を書かれたのか、穴でもあったら入りたいと思えました。それから毎年又行きたいねえと



(記念館)



云い乍ら早くも三年余り、此の間五月七日お友達の旦那様の御好意により再々会を得ました。大変喜ばれ今昔の話がつきませんでした。それでももうあの素晴らしいお手紙は書かれないうこと、寂しいことですが頑張って療養して下さいますよう祈っています。

(県女30回)



(前庭)



俳句

鳥越城跡

西昌 匙

桐咲くや手のひらはどの皆跡

谷の風騒ぎて松葉散らしけり

大日の手取に入るや竹皮散る

城山の裏に下り口竹落葉

大日の水引き入れて土間涼し

(高校5回)

尾坂薫先生の近況

金子 俊一

一昨年夏、音楽の尾坂先生よりお電話があり、伺いましたところ、自ら主宰なさる「こでまり会」の五十回記念公演を十二月一日に行ないたいので準備してくれるように、

とご依頼を受けました。「八十歳も超えたので五十回公演は区切りも良く引退を考えて居る。」とも云って居られました。当日、小松市民センターは娘さんお二人(共に東京芸大音楽科卒、同大学院修了、

二期会会員)とジョイントで美声の競演は大成功でした。其の後、五十一回、五十二回と娘さん達中心でリサイタルや発表会が行われました。今年二月中頃先生がひよっこり私の事務所にお見えになり、「いいかしら来年三月頃金沢でリサイタルを……。」とにっこり笑っておっしゃいました。少しおどろきましたが、喜んでお引受けしました。平成六年三月二十二日午後七時より、金沢市尾山町の石川県文教会館大ホールとスケジュールもスタートしました。先生のお気持ちにふさわしいステージをと企画しております。リサイタルに向け美声に磨きをかけながら、余暇には教え子達と水彩画を描いたり、フランス語の勉強をしたり毎日の様子です。(高校5回)

小松に帰って

陣内 智子

卒業してから十年目の春を迎えました。この十年間は、進学、転居、就職、結婚、出産とめまぐるしい変化の連続でした。二年前、しばらく離れていた小松へ戻って参りましたが、「朝夕仰ぐ白山や、永遠に変わらぬ故郷に……」まさに母校の校歌そのままの心境でした。そして、今更にあまり振り返ってみることもなかつた高校時代が急に懐かしい想い出として甦ってきました。

この春の教員の異動で、清水郁夫先生が小松高校の校長先生になられたことを知りました。清水先生といえは、知る人ぞ知る日本史の授業のあの名調子。私は三年生の時に教えて頂きましたが、歴史を語る時の先生のあの生き生きとした表情と、朗々と響きわたる声、リズムの良い語り調子にいつも引き込まれ、何百年も前に起ったことがらや活躍した人物が、先生の巧みな話術によってとても身近に感じられたものです。50分の授業時間が短く感じられ、普通



川柳

おんな

小森 靖江

裁ち鋏

おとこの首がぎれるなら

かわいくならう

そこにある鬼女の面

次の世も

おんなを生きる腕の中

(高校12回)

ならばあまり嬉しくない夏休みの補習も、清水先生の日本史なら、むしろ楽しみでさえありました。N先生の漢文やT先生のリーダーと共に、できることならもう一度受けたい授業のひとつです。今の生徒の方々は、もうあの心ときめく授業を受けられないので、とても気の毒に思います。たまには、校長先生の特別授業があつたら楽しいのでは……などと、ひとりでは想像して微笑んでいます。(高校35回)

今、楽しいこと

上坂 典子

「しくじっても誰も笑わない。手のひらと土は友達……」このCMコピーに誘われて、私は四月一日から陶芸教室に通い始めた。何故四月一日からかという、もし途中で挫折してもエイプルールフルから始めたんだからという言い訳が出来ると考えたからだ。そのくらい私は飽き性。よく言えば好奇心旺盛……。いろんなことに手を出してはみるもののどれも長く続いたためしがない。やれ忙しいだの、私には合わないだの全く根性無しもいとところ。だから今度もいつまで続くかわからないが、自分では「今までとはちよつと違うぞ」という手応えを感じている。それはCMコピーの通りだからだ。「手のひらと土は友達」こちらが素直な気持ちで接すれば、相手は決して裏切らない。時には意外な一面も見せてくれる。粘土を揉んでいる時は、不思議なくらい仕事のこととは忘れてる。いつもは一分一秒を気にしながら、それこれ「ストップウォッチが

友達」なのだが、粘土を触っていると、あつという間に時間が過ぎてしまう。そしてこの粘土がどんな風に形を変えていくのだろうと思うとわくわくする。

小松高校時代は部活動をしていなかった私だが、今まさに、陶芸クラブの新入生の気分。完成した作品といえはぐい呑みぐらいだが(それもぐい呑みとしてはとても使えず、私のアクセサリー入れとなっている)ささやかな夢は、茶碗蒸しの器を作ること。なかなか気に入ったものが見つからないので、ならば自分で作ってみようと……一体いつになったら出来るものやら、買ってきた方が早いという野次も聞き流し、週二回、森の中の工房に通っている。(高校31回)



42回を迎えた関東白楊会

今年の白楊会関東支部総会(県女、旧制受験で入学の高校4回卒までが会員、会員数二八一名)は、なんと、皇太子の納采の儀と同日の四月十二日に帝国ホテルのレインボールームで開催されました。

白楊会関東支部は昭和27年に40名位の先輩により創立、以後、毎年開催され、今年は42回目、当日は幹事学年の小松からのお客様9名も加わり総勢78名の盛会でした。

本年度幹事の安田利様(28回)の開会の挨拶に始まり、支部長の福岡文字様(17回)がお別れのご挨拶と乾杯の音頭をとって下さいました。

福岡様は白楊会関東支部の創立メンバーでもあり、ここ二十余年に渡り支部長を引き受けて頂いていましたが、今年三月金沢に転居され、当日は金沢からのご出席でした。

無理やり引き受けて頂いた後任支部長の北山寛子様(27回)からは『何も分かりませんが白楊会を続けいくために引き受けました。どうぞご協力をお願いします』とのご

挨拶がありました。

窓からは皇居に近い日比谷公園の森が見渡せ、料理はおいしい、おしゃべりは楽しく、50年も60年も昔の乙女にタイムスリップさせて頂いた春の一日でした。

なお、毎回、出席の皆さんには同窓会報をお配りしていますが『とても楽しみに拝見しています』との感謝の声を頂いていることを編集の方々にご報告いたします。

(関東白楊会会計)



短歌

母

楽満 礼子

「如月」と名づけし集い今はなく残りし母も逝きにけるかも

ふとかけるダイヤルの手の空しかりあらたに出づる寂寞の情

(県女33回)

小松高校生の作品

石川県高校短歌大会

入選作品

真夏日を受けて漕ぎゆく君の背が大きく見えるポートの中に

加藤 恵一

ポートルース大会の作品である。友人の背中が大きく見えて、その正確な動きが頼もしい。頭上から真夏の太陽が照りつけているという緊張と充実の場面がうまくとらえられている。ポートルースは今も七月に行われている。

姉が去り兄が出てゆきわれもまた さみしくなりゆく谷あいの家

西出 光

谷あいの村に作者は生きていく。この家を姉が出てゆき兄も出て行った。そして今また私も出て行くとうとしている。進学を前にして、この家に残る両親のことを気にかけているのである。高校生の目で現実を見つめているのである。

石川県高校詩大会入選作品

小松高校 宮岸奈実子

「目を開けて」

目を閉じて海を見た  
ちりばめられたサファイアが  
一面に輝きを放つようだ  
両手を伸ばしてそれをすくう  
それはたちまち弾丸と化した

目を閉じて高くそびえる木々  
を見た  
枝には虹色の小鳥が愛らしく  
さえずる

声の方へと一歩踏み出す  
声はたちまち弾丸の音と化した  
た

目を閉じて街を見た  
店先の真赤なバラが煌いてい  
る

それに近寄り香りを楽しむが  
それはたちまち戦塵と化した

目を開けて辺りを見た  
私をみつめる友がいる

静かな教室がここにある

これを決して失なわないよう  
に

私はさらに大きく目を開く

最近3ヶ年大学合格者数

Table with 13 columns: University Name, 5.3, 4.3, 3.3, University Name, 5.3, 4.3, 3.3, University Name, 5.3, 4.3, 3.3. Rows include various universities like 富山医薬大, 早稲田大, etc.

本部だより

◇ 照 会  
本会報をご覧になった会員各位へ照会します。

昨年から本会報を80才以上の皆様に直接お送りしていますが、中学関係では左記の5人の方々の分が受取人不明で返送されて来たので、方々手をつくしてさがしましたが判りません。90才を超えて居られると思われまますので、すでにお亡くなりになっていることも予想されますが、はっきりとしたことは判りません。消息をご存知の方がありましたら、生存の有無、消息を本部までお知らせください。

中学10回 寺西誠雄氏

(横浜市中区本牧3ノ谷233)

中学13回 山口清治氏

(豊中市小曾根4)

中学16回 西尾元一氏

(東京都杉並区成宗町1-70)

中学19回 大田外一氏

(西宮市段上町5-18-13)

◇本同窓会副会長、徳田美代子さんは六月十七日、お亡くなりになりました。長年にわたり副会長として同窓会の運

営に御協力いただきました。御冥福をお祈りします。

◇平成五年度小松同窓会新年会は、一月二十二日(金曜日)小松グランドホテルで開催されました。出席者は二百五名で、司会は清水道明氏(高校十九回)が行いました。懇親会では、各期でテーブルを囲み、にぎやかに懇談しました。最後に中学、県女、市女、高校の順で校歌を斉唱、万歳三唱で閉会しました。

◇第十一回北国風雪賞は七氏に贈られたが、小松同窓会副会長、南愛子さんも受賞された。半世紀近くにわたる幼児教育への貢献がみとめられたものである。

第7号の原稿募集

◎メ切 本年11月30日

◎内容 自由(在学中の思い出、近況、体験、趣味、旅行記、文芸等)

◎長さ 六〇〇字以内

◎送先 同窓会本部会報係宛

◎発行 平成6年1月同窓会新年会

◎発行 平成6年1月同窓会新年会

◎発行 平成6年1月同窓会新年会